

学校法人 野澤学園

—魅力発掘プロジェクト—

最終調整の儀



野澤学園の「職員と園の独自性」

“日常の中に設計された知性と余白”

結論（外部視点）

野澤学園は、日常の風景すべてが
“思考のきっかけ”になるように設計された園。

その環境に自然と適応し、
自ら考えて動ける人材が育っている。



**外部から見て「これはすごい」と思える
独自ポイント**

① 「理由を考えたくなる環境」で日常がつくられている

野澤学園の園舎や設備には、“これはなぜこうなっているのだろうか？”と思わせる要素が非常に多い。

- 園庭の木の配置に昼の影の落ち方まで計算されている
- 池・ヤギ・ぶどう棚など、他園にはない要素が自然に存在している
- ピロティや中庭、屋上庭園、ホール窓の設計などに“**明確な機能美**”がある

▶ これらは単なるオシャレや奇抜さではなく、
「**子どもに考えさせる**」「**関わらせる**」ための仕掛けになっている。

視点

「全体が“思考を促す装置”のように設計された園」

「一つひとつの設備に、“考えるきっかけ”としての役割がある」

→ その“問いを育てる学園の環境設計”が、教育観と完全に一致している

② 説明を待たず、自分で考え・動ける職員が活躍できる環境がある

一般的な保育現場では、「やるべきことを示される→遂行する」職員像がまだ根強い。だが野澤学園では、“なぜこれがここにあるのか”“この子に何が必要か”を、職員たちが自ら考えて動ける環境が用意されている。

- ヤギの飼育に関わり、子どもとの接点を考える
- 危険とされる遊具の存在意義を見直し、どう安全に活用できるかを検討する
- 特徴的な園庭や導線の中で、“子どもが何を感じ取るか”に意識を向ける

▶ 日常の判断に、自分なりの根拠や哲学が込められている職員が多い

視点

「決まったことをやるのではなく、“考えながら保育する”職員が多い」

「環境の工夫に対し、職員自身が“それをどう活かすか”を常に考えている」

→ これは組織設計というより、“自然に思考する人が育つ風土”の証明

③ 園全体が「子どもが自由に考えたくなる構造」で統一されている

野澤学園では、職員も子どもも、“答えが一つではない場所”で生きている。その中で生まれるのは、「こうしてみよう」「これってなんだろう？」という自発的な行動や感性。

- 池の中のカエルの卵を見つけてスケッチし始める子
- 木の実や葉を集めて“園内マルシェ”を始める子
- お兄さんの真似をして丸太に挑戦しようとする子

この園では、子どもが受け身でいる時間が極端に少ない。

▶ 「やってみたいこと」「考えたいこと」が、空間から自然に伝わってくる。

視点

「園そのものが“子どもに自由を渡している”設計になっている」
「大人の指示よりも、“場”が子どもの想像力を引き出している」
→ 保育内容以前に、“**教育になる空間**”が成立している

野澤学園を一言で言うと...

「保育の中に、問いが仕掛けられている園」

「動き出すのは、先生より先に子ども」

「考えたくなる毎日が、自然とそこにある」



今話を聞いて、どんなことを感じましたか？
紙に、書いてみましょう！

- 思った通りだった
- 意外だった
- 知らなかった
- その他、感じたこと何でも

① 「理由を考えたくなる環境」で日常がつくられている

野澤学園の園舎や設備には、“これはなぜこうなっているのだろう？”と思わせる要素が非常に多い。

- 園庭の木の配置に昼の影の落ち方まで計算されている
- 池・ヤギ・ぶどう棚など、他園にはない要素が自然に存在している
- ピロティや中庭、屋上庭園、ホール窓の設計などに“**明確な機能美**”がある

▶ これらは単なるオシャレや奇抜さではなく、
「子どもに考えさせる」「関わらせる」ための仕掛けになっている。



「全体が“思考を促す装置”のように設計された園」
「一つひとつの設備に、“考えるきっかけ”としての役割がある」
→ その“問いを育てる学園の環境設計”が、教育観と完全に一致している

② 説明を待たず、自分で考え・動ける職員が活躍できる環境がある

一般的な保育現場では、「やるべきことを示される→遂行する」職員像がまだ根強い。だが野澤学園では、“なぜこれがここにあるのか”“この子に何が必要か”を、職員たちが自ら考えて動ける環境が用意されている。

- ヤギの飼育に関わり、子どもとの接点を考える
- 危険とされる遊具の存在意義を見直し、どう安全に活用できるかを検討する
- 特徴的な園庭や導線の中で、“子どもが何を感じ取るか”に意識を向ける

▶ 日常の判断に、自分なりの根拠や哲学が込められている職員が多い



「決まったことをやるのではなく、“考えながら保育する”職員が多い」
「環境の工夫に対し、職員自身が“それをどう活かすか”を常に考えている」
→ これは組織設計というより、“自然に思考する人が育つ風土”の証明

③ 園全体が「子どもが自由に考えたくなる構造」で統一されている

野澤学園では、職員も子どもも、“答えが一つではない場所”で生きている。その中で生まれるのは、「こうしてみよう」「これってなんだろう？」という自発的な行動や感性。

- 池の中のカエルの卵を見つけてスケッチし始める子
- 木の実や葉を集めて“園内マルシェ”を始める子
- お兄さんの真似をして丸太に挑戦しようとする子

▶ この園では、子どもが受け身でいる時間が極端に少ない。
「やってみたいこと」「考えたいこと」が、空間から自然に伝わってくる。



「園そのものが“子どもに自由を渡している”設計になっている」
「大人の指示よりも、“場”が子どもの想像力を引き出している」
→ 保育内容以前に、“教育になる空間”が成立している

野澤学園を一言で言うと...

「保育の中に、問いが仕掛けられている園」

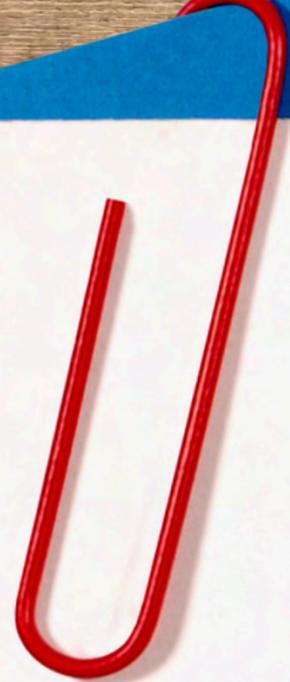
「動き出すのは、先生より先に子ども」

「考えたくなる毎日が、自然とそこにある」



謎 野澤学園の RADIO





FINISH

2階の日本庭園のようなものは何？

ラジオネーム：西村山 さん

FINNISH

ガラッコ、グローブジャングルなど
昨今、危ないから撤去と言われがちな遊具が
なぜ置かれているの？

ラジオネーム：一翠の閉店が悲しいさん

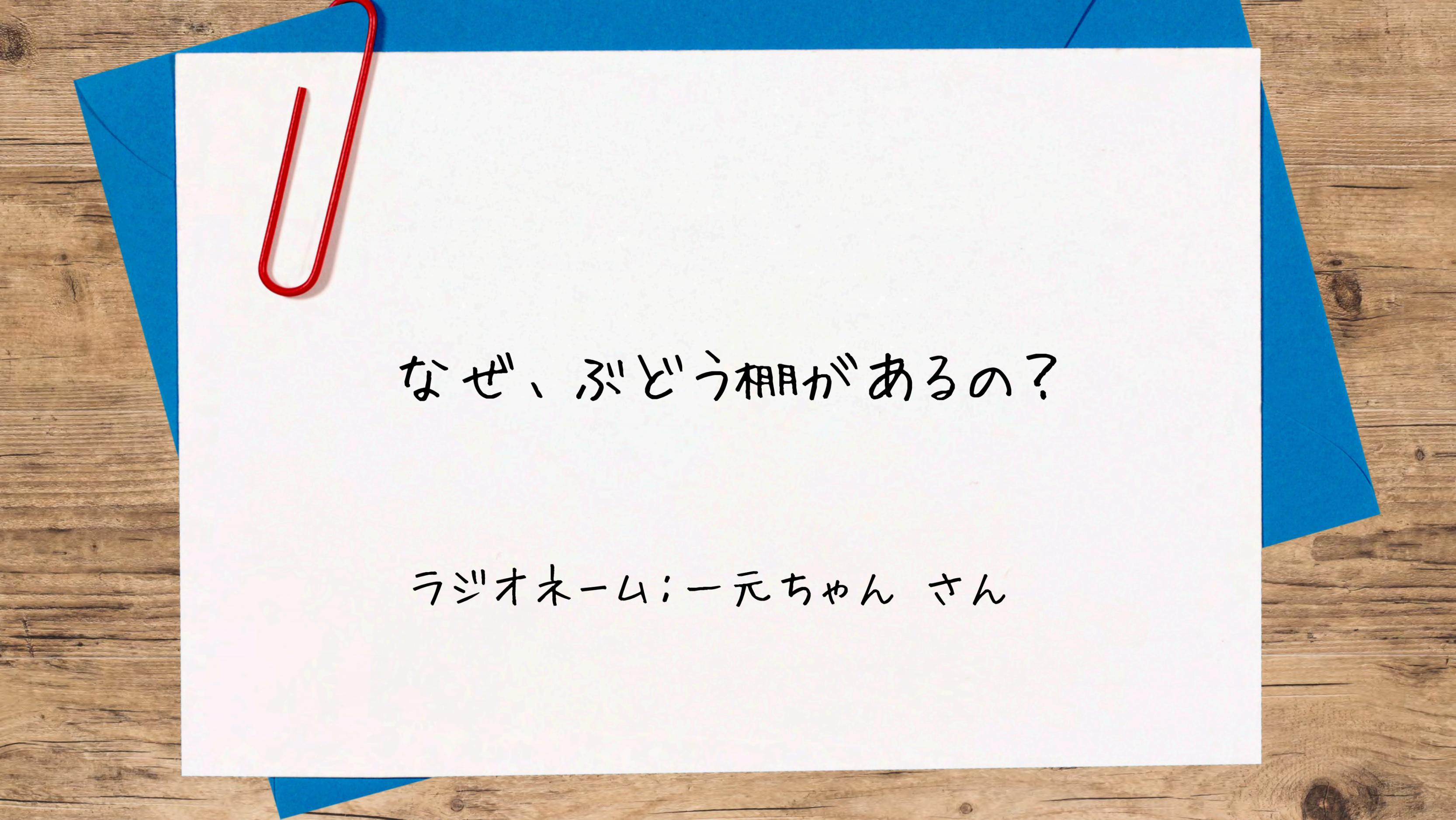


柵の高さが2.4mの理由

ラジオネーム:夏のヤザンさん

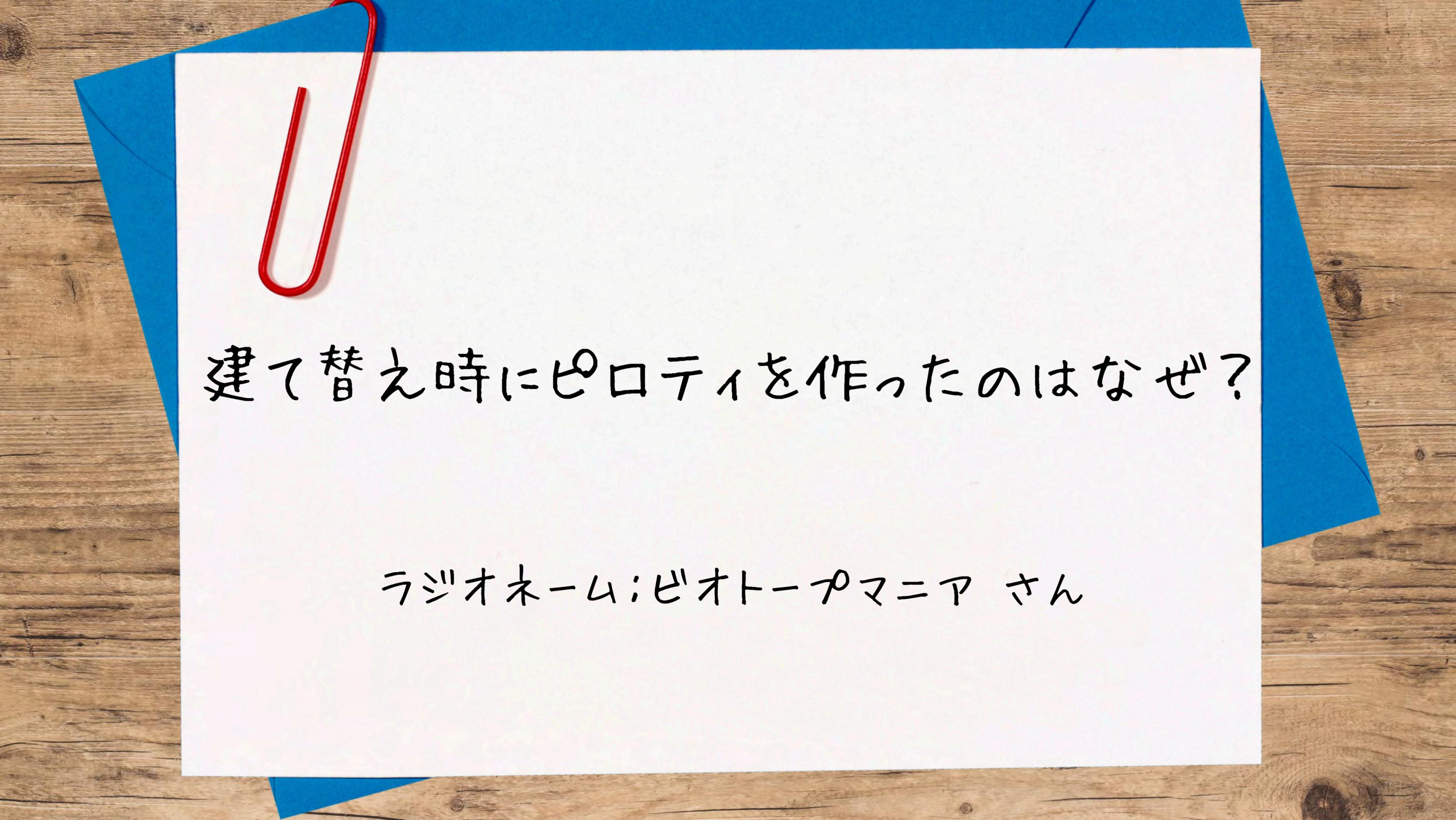






なぜ、ぶどう相があるの？

ラジオネーム：一元ちゃん さん



建て替え時にピロティを作ったのはなぜ？

ラジオネーム：ピオトーマニア さん

謎 野澤学園の RADIO



アンセム

野澤学園で育まれる可能性が高い
“人格タイプ（アンセム）”とは...



アンセムとは？

“その企業で働くことで獲得が予想される人間力”のこと

リッツ・カールトン



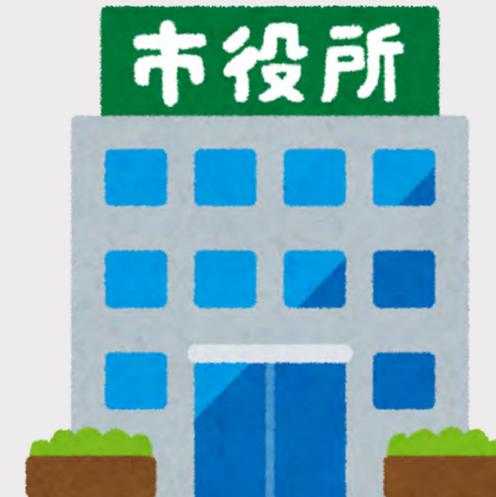
モットー

*“We are
Ladies and
Gentlemen
serving
Ladies and
Gentlemen.”*

紳士淑女を
おもてなしする
私たちも
また紳士淑女です。

▶ 礼儀、思いやり。

市役所



▶ 真面目、時間通り正確に。

アンセム案

“ —
| 考え、感じ、動く人に育つ |
— ”

ant hem

「考え、感じ、動く人。」

このアンセムは、この園で働くと、
自然と育まれる人間性です。

野澤学園で働く職員のみなさんが、
“自分の中にねむる童心を解き放つ”のが、
こういった人間性を育む近道になります

野澤学園では、「なぜ？」と考えることに慣れていく

1. なんでなんで隊長力（＝探究心）

正式名：思考起動力（なんで？と考え始められる力）

由来

「なんで？」を口癖にする子どもたちのように、あらゆる物事に問いを立てられる力が、野澤学園で磨かれる

自分の童心に、語りかける言葉の例

「“なんで？”と思える人が、一番早く冒険を始められる」



野澤学園では、「なぜ？」と考えることに慣れていく

野澤学園の空間には、説明書きがないものが多い。

それは、見方を変えれば「自由に考えていい」というサインでもある。

- 丸太や山、池、ビオトープ……“どう活用してもいい”ものが多い
- 遊び方が決まっていない環境＝“正解がひとつじゃない”を日常にしている

▶ その結果、子どもも職員も「自分なりに考える」ことに対して抵抗がない。
「使い方」よりも、「感じたこと」が起点になる文化が育っている。

この園で育つ人は

「まず考えてみよう」と思える。

「人の意見を聞く前に、自分の感覚で向き合ってみよう」と自然に思える。

野澤学園では、「感性」と「好奇心」がずっと生きている

2.おどろきセンサー感度100%

正式名：感性保持力（小さな違和感や変化に気づける力）

由来

葉っぱが落ちた、雨が降り出した、風の匂いが変わった——
それに気づく目線を、人間力としてとりあげました

自分の童心に、語りかける言葉の例

「小さな“おどろき”を見つけられる人は、日常がずっと楽しい」



野澤学園では、「感性」と「好奇心」がずっと生きている

野澤学園は、“自然”や“揺らぎ”が常にそばにある園。

人工物だけではない。ヤギや土、木の実、草の香り、虫の声——
それらが、子どもや職員の「センサー」を常に刺激し続けている。

- 「なんだこれ？」と思う体験が日常の中に織り込まれている
- 感覚的に、心を動かす“場面”が多い（におい／音／光／触感）

この園で育つ人は

“感じること”を大事にする。

目に見えない違和感や楽しさを、ちゃんとひろえる。

今の話を受けて、どんなことを感じましたか？
紙に、書いてみましょう！

- 思った通りだった
- 意外だった
- 知らなかった
- その他、感じたこと何でも

野澤学園では、「なぜ？」と考えることに慣れていく

1. なんでなんで隊長力（＝探究心）

正式名：思考起動力（なんで？と考え始められる力）

由来

「なんで？」を口癖にする子どもたちのように、あらゆる物事に問いを立てられる力が、野澤学園で磨かれる

自分の童心に、語りかける言葉の例

「“なんで？”と思える人が、一番早く冒険を始められる」



野澤学園では、「感性」と「好奇心」がずっと生きている

2. おどろきセンサー感度100%

正式名：感性保持力（小さな違和感や変化に気づける力）

由来

葉っぱが落ちた、雨が降り出した、風の匂いが変わった——それに気づく目線を、人間力としてとりあげました

自分の童心に、語りかける言葉の例

「小さな“おどろき”を見つけられる人は、日常がずっと楽しい」



野澤学園では、「なぜ？」と考えることに慣れていく

野澤学園の空間には、説明書きがないものが多い。

それは、見方を変えれば「自由に考えていい」というサインでもある。

- 丸太や山、池、ビオトープ……“どう活用してもいい”ものが多い
- 遊び方が決まっていない環境＝“正解がひとつじゃない”を日常にしている

▶ その結果、子どもも職員も「自分なりに考える」ことに対して抵抗がない。
「使い方」よりも、「感じたこと」が起点になる文化が育っている。

この園で育つ人は

「まず考えてみよう」と思える。

「人の意見を聞く前に、自分の感覚で向き合ってみよう」と自然に思える。

野澤学園では、「感性」と「好奇心」がずっと生きている

野澤学園は、“自然”や“揺らぎ”が常にそばにある園。

人工物だけではない。ヤギや土、木の実、草の香り、虫の声——それらが、子どもや職員の「センサー」を常に刺激し続けている。

- 「なんだこれ？」と思う体験が日常の中に織り込まれている
- 感覚的に、心を動かす“場面”が多い（におい／音／光／触感）

この園で育つ人は

“感じること”を大事にする。

目に見えない違和感や楽しさを、ちゃんとひろえる。

“ —
考え、感じ、動く人。
— ”

1.なんでなんで隊長力（＝探究心）

なんで？と考え始められる力

2.おどろきセンサー感度100%

小さな違和感や変化に気づける力

3.

4.



野澤学園では、目的や意味を、あとからでも考えられる

3.意味つみき力

正式名：意味創出力（あとから意味を見いだせる柔軟性）

由来

「なんかやってたら意味がわかってきた！」という
“保育あるある”を、人間力として規定

自分の童心に、語りかける言葉の例

「最初は分からなくていい。あとで“意味がわかった”ってなるから」



野澤学園では、目的や意味を、あとからでも考えられる

野澤学園は「説明してからやらせる」ではなく、「やってみて考える」が基本。
これは、結果的に“**あとづけでもいいから、自分の中に意味を作る**”という力を育てる。

- 「やってみたら面白かった」「あとで意味がわかった」
- 「最初は意味不明だったけど、続けてたら納得した」

▶ これは、社会で生きるうえでの大きな柱の一つになる。
世の中の大半は、「説明が先にある」わけではないから。

この園で育つ人は

「やりながら意味を探せる」
すぐにわからなくても、途中で引き返さずに進んでいける。

野澤学園には「違い」や「境界」を受け入れ・超える土壌がある

4.ボーダレス

正式名：他者交差感受性（違いや境界を受け入れ・超える力）

由来

金子みすゞの詩のように、“ちがい”を大事にできる人を、あえて役職名っぽく表現してみました

自分の童心に、語りかける言葉の例

「“ちがい”を楽しめる人がいると、場の空気がいいよね」



野澤学園には「違い」や「境界」を受け入れ・超える土壌がある

幼稚園と保育園、0歳と5歳、職員と外部講師、保護者と厨房、地域と園——
野澤学園は、立場・目的・背景の異なる人がひとつの“街”のように共存している。

- 「違う人がいること」が、日常の風景になっている
- 子どもも職員も、「全員が同じじゃない」ことを当たり前として育つ

この園で育つ人は

「ひとつじゃない考え方や価値観」を面白がれる。
自分と違うことに、構えたり拒んだりしない。

“ —
考え、感じ、動く人。
— ”

1.なんでなんで隊長力（＝探究心）

なんで？と考え始められる力

2.おどろきセンサー感度100%

小さな違和感や変化に気づける力

3.意味つみき力

あとから意味を見いだせる柔軟性

4.ボーダレス

違いや境界を受け入れ・超える力



アンセムとしてのまとめ文案

採用・理念パンフ等に活用可能

野澤学園では、「これって、なんでだろう？」と考えることが日常の中にあります。

目の前のものに、自分の感じ方で意味を見つける。

答えがなくても、考えながら動いてみる。

自然の変化や人との違いに、ちゃんと気づける。

そんな環境の中で働く人は、

「自分で考え、感じ、動ける人」になるのです。

今話を聞いて、どんなことを感じましたか？
紙に、書いてみましょう！

- 思った通りだった
- 意外だった
- 知らなかった
- その他、感じたこと何でも

野澤学園では、目的や意味を、あとからでも考えられる

3.意味つみき力

正式名：意味創出力（あとから意味を見いだせる柔軟性）

由来

「なんかやってたら意味がわかってきた！」という
“保育あるある”を、人間力として規定

自分の童心に、語りかける言葉の例

「最初は分からなくていい。あとで“意味がわかった”ってなるから」



野澤学園には「違い」や「境界」を受け入れ・超える土壌がある

4.ボーダレス

正式名：他者交差感受性（違いや境界を受け入れ・超える力）

由来

金子みすゞの詩のように、“ちがい”を大事にできる人を、
あえて役職名っぽく表現してみました

自分の童心に、語りかける言葉の例

「“ちがい”を楽しめる人がいると、場の空気がいいよね」



野澤学園では、目的や意味を、あとからでも考えられる

野澤学園は「説明してからやらせる」ではなく、「やってみて考える」が基本。
これは、結果的に“あとづけでもいいから、自分の中に意味を作る”という力を育てる。

- 「やってみたら面白かった」「あとで意味がわかった」
- 「最初は意味不明だったけど、続けてたら納得した」

▶ これは、社会で生きるうえでの大きな柱の一つになる。
世の中の大半は、「説明が先にある」わけではないから。

この園で育つ人は

「やりながら意味を探せる」
すぐにわからなくても、途中で引き返さずに進んでいける。

野澤学園には「違い」や「境界」を受け入れ・超える土壌がある

幼稚園と保育園、0歳と5歳、職員と外部講師、保護者と厨房、地域と園——
野澤学園は、立場・目的・背景の異なる人がひとつの“街”のように共存している。

- 「違う人がいること」が、日常の風景になっている
- 子どもも職員も、「全員が同じじゃない」ことを当たり前として育つ

この園で育つ人は

「ひとつじゃない考え方や価値観」を面白がれる。
自分と違うことに、構えたり拒んだりしない。

ブランドプロミス

野澤学園が、職員・子ども・保護者など、
園に関わる人たちに向けて伝えたい、
「これまでも、これからも、ずっと大切にしていきたい」と願う約束を、
言葉にしたものです。

すでに大切に守られてきたこと、
そしてこれからもっと育てていきたいことを、
改めて、まっすぐに見つめ直し、言葉にしました。

1. 職員への約束

「あなたの知的探究心を、歓迎します。」

1. 職員への約束

「あなたの知的探究心を、歓迎します。」

背景にある野澤学園らしさ

- 理事長が「環境や設計」に込めた思考を、職員が“自分で見つけてよい”風土がある
- 指示待ちではなく、「なんで?」「どうして?」が歓迎される職場文化
- 同僚との対話を通じて、“気づき”や“問い”を深めあう関係性がある
- 子どもだけでなく、大人も「探究しつづける人」として、成長し続けられる

言い換えコピー案

- 「探究したくなるあなたを、私たちは歓迎します。」
- 「探究する人を、歓迎し、支え、育てます。」

2. 子どもへの約束

「あなたの“もっと知りたい”が、園の宝物。」

2. 子どもへの約束

「あなたの“もっと知りたい”が、園の宝物。」

背景にある野澤学園らしさ

- 園には「正解のない遊び」と「決めつけられない空間」が、あちこちにある
- 子どもが思わず立ち止まるような、ヤギ、丸太、土の手ざわり。
- 大人も答えを急がず、一緒に驚き、考え、話し合う毎日。
- 子どもたちの“もっと知りたい”が、そっと育つように。この園は、**環境ぜんぶ**で問いかけている

言い換えコピー案

「ここには、“ふしぎ”が、いっぱいかくれてるよ。」

「わからないことを聞いてくれたら、いっしょにかんがえるよ。」

3. 保護者への約束

「子どもの知的好奇心に呼びかける環境を、創り続けます。」

3. 保護者への約束

「子どもの知的好奇心に呼びかける環境を、創り続けます。」

背景にある野澤学園らしさ

- ヤギ、遊具、自然素材の家具、光と影の導線など、“五感を刺激する仕掛け”が随所にちりばめられている
- 遊びには、深い学びや問いが宿っている
- その場その瞬間で「わかる」よりも、「あとから効いてくる」知的体験を重視
- 教えるのではなく、“呼びかける”。押しつけず、子どもが自ら発見する環境を構築する

言い換えコピー案

- **「“遊び”が、“問い”に変わる瞬間を、生み出しつづけます。」**
- **「知的好奇心に、そっと火を灯す園であり続けます。」**

ブランドプロミス まとめ

対象	プロミス構文	実質の主語	注目するもの
職員	あなたの知的探究心を、歓迎します。	私たち	探究・問い
子ども	あなたの“もっと知りたい”が、園の宝物。	私たち	好奇心・意欲
保護者	子どもの知的好奇心に呼びかける環境を、創り続けます。	私たち	環境・設計思想

→ 全てのステークホルダーに、「見えない価値を見えるようにする」姿勢を貫いている

子どもに

「ねえ、先生。僕、この園に来て、良かったよね？」
と聞かれたら。

あなたはどんな風に伝えますか？

「うん、良かったと思うよ！だって…」

から始まる内容を書いてください。

その際に、**ブランドプロミス**を使ってください。

知人が、転園を検討してるとします。

「ねえ、あなたの働いてる野澤学園って、職員からすると何がいいの？」
と聞かれた時に、どのように伝えますか？

その際に「ブランドプロミス」を使って、説得力を増せるように試してください。

例：

うちの園は、職員に、...って〇〇してるんだよ。

野澤学園の「未来価値」

① 「哲学する子ども」を自然発生させる日本初の園

気づき

多くの教育施設が「論理的思考」や「探究学習」に力を入れている中、野澤学園は、それを“カリキュラム化せずに”自然にやっている。

- 池、ヤギ、構造、井戸、木漏れ日——それらに意味を問う経験
- 「これ、なんであるんだろう？」から始まる日常
- 「決まった使い方がない」から、考える前に感じて、そして考える

この構造が生むのは

“自分で意味をつけようとする子ども”＝“哲学者の芽”

→ これは、今のSTEAMでも探究学習でもない、“意味創出型の幼児教育”

→ 日本にはまだ一つもない領域。野澤は、すでにその土台を完成させている。

名称案

「子どもが“なぜ？”に出会える園」

「幼児の哲学が育つ場所」

「意味を発明する園」

② 世界に向けた「空間思想教育」のモデル校になれる

気づき

野澤の園舎・環境・導線設計は、ただの“本物志向”ではない。

環境そのものが「無言の教師」として機能している。

→ “語らない教育” = 空間と環境に意味を込め、説明なしで子どもが学び始める仕組み

→ このアプローチは、ヨーロッパの「レッジョ・エミリア」などと思想的に近く、国際的文脈に載せられる

世界的に稀有な点

- 設備に思想があるだけでなく、その思想を“対話の余白”として残していること
- 「何のためにこれがあるのか？」という余白が、「子どもに委ねる教育」そのものになっている

名称案

- 「空間が教える園」
- 「解釈されるための設計」
- 「こたえのない教育環境」

野澤学園が持つ唯一無二の価値は、

「説明しきれないくらい豊かで、
全てが定義されていないからこそ深い」ということ。

